

---

# 祐子さんちの勇人（はやと）くん

西条基樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

祐子さんちの勇人くん

### 【Nコード】

N3934Y

### 【作者名】

西条基樹

### 【あらすじ】

前作「阪神淡路大震災」で、アクセス数がダントツに多かった「神様はいるのか?」「番外編>息子の理論」に出てきた、悩める高校1年生「勇人」君のその後です。)

(前書き)

前作「阪神淡路大震災」で、アクセス数がダントツに多かった「神様はいるのか?」「番外編>息子の理論」に出てきた、悩める高校1年生「はやと勇人」君のその後です。(

「神が全知全能ならば…」

高校1年生の「はやと勇人」は、悪魔の辞典のページをめくりながら呟いた。

「なんで、悪魔が存在するんや？」

勇人は「はーっ」とため息をついた。

「神って、そもそもなんなんや？」

勇人は両目をグリグリ指で押さえながら言った。

「勇人ー！」

ドアの外から、母、祐子の声がした。

「勇人は、そもそもどうやって生まれた？」

「神」と「勇人」が入れ替わっていることに気づかないまま、勇人は悩んでいる。

「勇人ってば！」

「勇人の存在意義は？」

「勇人っ！ドア開けるぞ！」

「ドアの存在意義…ん？」

勇人は目から手を離した。

「…俺なんで、ドアの存在意義なんて考えてんねや？」

勇人は首を傾げた。

……

「ママ」

勇人は、キッチンで晩御飯の支度をしている祐子に声を掛けた。

「ん？なんや？勇人」

「さつき、何を呼んどったん？」

「晩御飯カレーでええか？」

「ええけど、それだけ？」

「ん、そやけど。あんた寝とったんちゃうかつたんや。」

勇人はため息をついた。

「おかげで、頭っからやり直しやないか。」

「????？」

祐子が不思議そうに、勇人を見た。

「何もない。」

勇人は手を上げて言って、ダイニングテーブルについた。

「コーヒー飲む？」

祐子が野菜を切りながら言った。

「うん！」

「じゃあ、ママの分も作ってな。」

「……！」

勇人はしてやられたと思いながら、立ち上がった。祐子がくすくすと笑いながら言った。

「また天使と悪魔か？」

「うん、まあ……」

「飽きひんねえ……」

「堂々巡りでらちあかんのや。」

「まあ、ボケ防止でええんとちゃう？」

「俺は年寄りか！」

祐子がまったくくすくすと笑った。

母、祐子は勇人が学校の勉強をほっちらかして、神だの天使だの悪魔だのと悩んでいることに対して、理解があつた。

「でどこまで、突き止めたん？」

「だから、堂々巡りなんやて。神様の存在意義すらわからん。」

「存在意義がないと、存在したらあかんの？」

「!?!?」

目を見張る勇人に、祐子がニヤリと笑った。

……

「お前、まだ「ママ」なんて言っとんか！」

翌日、勇人の部屋に遊びに来たクラスメートの「謙」<sup>ケン</sup>がそう言っ  
て笑った。

「ええやないか。ママがそう呼べ言っんやから。」

勇人は、ゲームのコントローラーを操作しながら言った。

「ママに逆らえないお坊ちゃまー！」

謙がそう言って、げらげらと笑った。勇人は黙って、コントローラ  
ーを操作している。

……

「ママ」

勇人は、謙と勇人のためにお菓子を用意している祐子の傍に寄って、  
小声で呼び掛けた。祐子は「ごめん」と言った。

「ジュース、コーラなかったから、オレンジジュースでええかな？」

「それはええんやけど…なあ、ママ」

「ん？なんや？」

祐子はジュースとお菓子を乗せた盆を、勇人に向けながら言った。

「友達の来てる時だけ「ママ」じゃない呼び方していい？」

「え？…あー…」

祐子がわかったように笑った。

「うん、ええよ。友達の来てる時だけな。」

「うん！」

勇人はほっとしたように、盆を持って部屋に入って行った。

……

祐子は、ダイニングテーブルで独りゆつくりコーヒーを飲みながら、勇人とあやめが幼いころを思い出していた。祐子は、勇人が5歳（姉のあやめは7歳）の時に、こう言ったのだ。

「ママがどんなにおばあちゃんになっても「ママ」って呼んでな。ママ、ずっと「ママ」って言われたいねん。」

その時、勇人もあやめも「わかった！」と笑顔で答えてくれた。その事を、勇人もあやめも覚えてくれているようだ。高校3年生になるあやめも、友人から「まだママなんて呼んでるの？」と言われたそうだが、それでも変わらず、祐子の事を「ママ」と呼んでくれている。

（勇人、なんて呼ぶんやろなあ……。 「おかん」？ 「おばはん」？ 「くそばばあ」？）

祐子はそこまで考えて、吹き出した。

（ま、友達の前くらい、なんて呼ばれても返事したるか。）



祐子はそう思いながら、コーヒーを一口含んだ。  
その時、勇人の部屋のドアが開いて、勇人が顔を出した。

「母上っ！！」

祐子は、ぶつとコーヒーを吹いてしまった。

……

土曜日・

勇人は、自転車に乗ってゲームショップに向かっていた。  
その時、教会が前方に見えた。

「あんなところに教会なんてあったんや。」

普通の家に十字架が掲げられているような、小さな教会だった。

「……………」

勇人はふとブレーキを握り、自転車を止めた。  
…いつもの疑問が頭をよぎった。

勇人は自転車を教会の前に置き、中へ入った。  
小さな礼拝堂だった。

(なんか、ゲームの中にいるみたいや…)

勇人はそう思いながら、奥に進んだ。  
すると、奥のドアが開き、十字架を首にかけた男性が現れた。

かなり年の入った、小さな男性だ。

「どうされました？」

その男性が柔らかな笑顔を見せて、勇人に言った。勇人は、頭を下げてから尋ねた。

「ここは、カトリック 旧教ですか？ プロテスタント 新教ですか？」

「新教ですよ。」

「じゃあ、牧師さんですね。」

「ええ、そうです。キリスト様にご興味が？」

「いえ…。うちは敬虔な「曹洞宗」なので。」

勇人がそう言うと、小さな「牧師」が笑った。

「なるほど。その敬虔な「曹洞宗」のあなたがどうしました？」

「お聞きしたいことがあるんです。」

「ええ、どうぞ。」

牧師は、そばにあるベンチ状の椅子を手で差しながら言った。勇人は頭を下げて、その椅子に座った。

牧師も、そばの椅子に座った。

「神様はいるんですか？」

「ええ、いますとも。」

勇人の質問に、牧師は即答した。ここまでは、勇人も想定内だ。

「では、どうして大震災であんなに人が死んだんですか？」

「ああ、君は…」

牧師がそう驚いたように言って、また微笑んだ。

「君は、神が我々を天から見下ろしていると、思っているんだね？」

「!?!?…え…」

勇人は、想定外の牧師の言葉にとまどった。

「えっと…はい。」

「神は…天から私たちを見下ろしているわけではありません。」

「じゃあ、どこに？」

牧師は微笑んで、人差し指を勇人の心臓の辺りに、そっと当てた。

「神はここにいます。」

勇人はその牧師の指を見て目を見開いた。そして自分でも、指を自分の胸に当てて聞き返した。

「ここ…?」

「そうです。」

「…???…そもそも、神ってなんなんですか？」

「神」は…」

牧師は指を離し、勇人に柔和な笑みを見せて言った。

「「愛」です。」

……

勇人は自転車を全速力で走らせていた。ゲームショップには行かずに、家に向かって必死に自転車を漕いだ。

（神は「愛」や！…そうか！神は天にいるのではなく、自分の心の中にいる！）

やっと納得できる答えが出たと、勇人は思った。

……

「ママ！」

勇人は、リビングに飛び込んだ。祐子は「おかえり」と言いながら、リビングのソファから体を起こした。寝っ転がってテレビを見ていたようだ。

「ママ！わかったんや！」

「何が？」

「神様が何か！」

「おおー……」

祐子はリモコンを取り、テレビを消しながら言った。

「神様はいるかどうかってこと？」

「そんなことは、超越した答えや！」

「？…どういふこと？」

勇人は興奮気味に、祐子の隣に座って言った。

「「神」は「愛」や！俺たちの「ここ」に……」

勇人は自分の胸を指差した。

「「ここ」にいるんや！天にいるんやない！」

祐子は目を見開いていたが、やがてにつこりと笑った。

……

1週間後 -

勇人は、自転車で教会に向かった。だが目を見張って、慌ててブレーキをかけた。

「!！」

掲げられていた十字架がなかった。だが家の形はそのままだ。

勇人は、教会の形をしたままの家の前に自転車を止めた。そして玄関に掛けられた看板を見て驚いた。

「…売家…？」

勇人は、しばらく呆然としていた。

……

勇人は、普通の少年に戻っていた。天使だとか悪魔だとかという話もしなくなつた。

(それは、それで寂しいけどなあ…)

祐子はそう思っていた。父親の守は「これで、また勉強してくれるようになるだろう。」とほっとしたようだ。

…しかし、そうはならなかった。勉強する様子は全くない。

「ママ、おはよう」

日曜日、勇人がくしゃくしゃの頭を手で梳きながら、リビングに入ってきて言った。

祐子は、キッチンで洗い物をしながら「おそよう」と笑って答えながら言った。

「ブランチ食うか？」

「うん。」

勇人はダイニングテーブルについた。

「なあ、ママ…」

「うん？」

祐子はマグカップを勇人の前に置いて「何？」と言った。勇人がテーブルに肘をつき、その手にあごを乗せたまま言った。

「…幸せってなんやろな？」

「…!？」

祐子は固まってしまった。

……

勇人は「行つてきます！」と言って、玄関に走った。

「どこに行くん!?!」

祐子が慌てて、靴の紐を結ぶ勇人の背中に駆け寄つて言った。

「友達んち」

「そうか。お菓子かなんか持って行かんでええんか？」

「いらん。俺、買っていくから。」

「そうか。」

祐子は立ち上がった勇人を不安げに見た。…さっきの「幸せってなんやらな」という言葉が引っかかっていた。

「ママ」

勇人は背を向けたまま言った。

「何？」

「俺が1時間経つても帰つてこなかったら…」

「!?!?!?!」

祐子はまた固まった。

勇人は振り返り、カッコよく祐子を指差して言った。

「俺が楽しんでると思ってくれ。」

「……」

勇人は「じゃな」と2本の指で敬礼し、ドアを開いて出て行った。

祐子は、ドアが閉まってから「ガクッ」と体を傾けた。

(終)

⋮

勇人君、また新しいネタをお待ちしています ( m | m ) b y  
西条基樹



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3934y/>

---

祐子さんちの勇人（はやと）くん

2011年11月10日09時35分発行